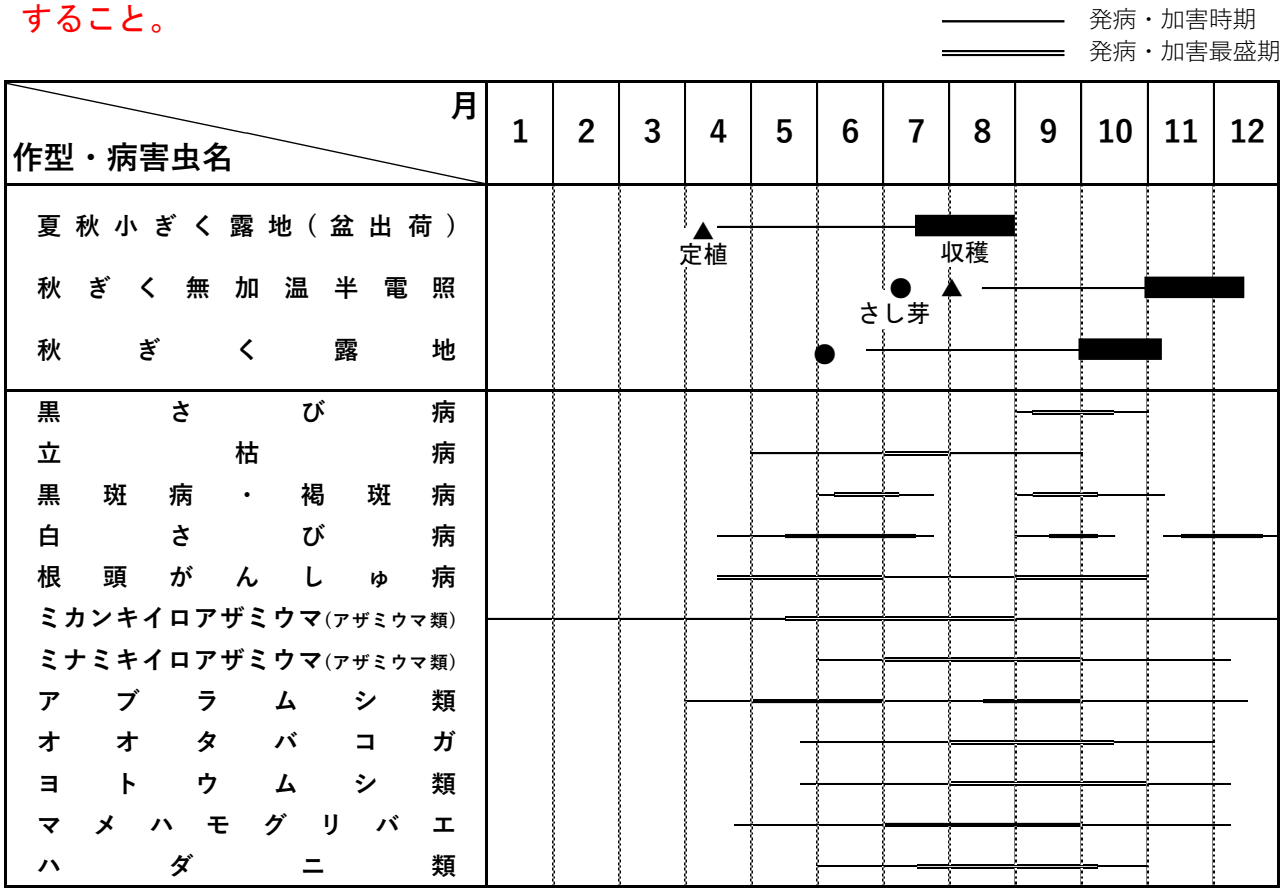
きく

農薬取締法上、「きく」は食用以外のきくを指す。
葉を食用にする場合は、「野菜類」「葉菜類」「レタス類以外のきく科葉菜類」および「きく（葉）」に適用のある農薬を使用すること。
花を食用にする場合は、「野菜類」「食用花」および「食用ぎく」に適用のある農薬を使用すること。



黒さび病

留意事項

1 薬剤による防除では、予防散布が重要である。
2 薬剤散布は葉の裏を中心に行うと効果的である。
3 SDHI剤≪７≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 被害株からの採穂を避ける。
2 被害葉は早めに取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
3 施設では換気を良好にし、湿度を下げる。
4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・マネージ乳剤 ＜３＞【500～1000倍　発病初期／6回】
・アフェットフロアブル ≪７≫【2000倍　発病初期／3回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

立枯病

留意事項

1 QoI剤≪１１≫は耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 発病の多いほ場では、密植を避け風通しを良くする。
2 連作を避ける。
3 発生が見込まれる時期に下記の薬剤を散布する。

・オーソサイド水和剤80 ＜Ｍ４＞
【花き類･観葉植物(除ばら、りんどう、せんにちこう、コスモス、ひまわり、シネラリア、スイトピー、みやこわすれ、アンスリウム、斑入りアマドコロ)
600倍　発病前～発病初期／8回】

4 発生を認めたら下記の薬剤を施用する。

・ユニフォーム粒剤≪１１≫＜４＞
【立枯病(リゾクトニア菌)　土壌表面散布　18kg／10a　定植時または生育期／3回】
・リゾレックス水和剤 ＜１４＞
【花き類・観葉植物　土壌かん注（3L／㎡）　500～1000倍　生育期／5回】

黒斑病・褐斑病

留意事項

1 露地栽培に発病が多い。
2 最終摘心後、降雨の多い場合に発病が多いので、発病前から薬剤の予防散布を行う。
3 ダコニール1000、ダコニールアルファに含まれる成分TPNの総使用回数は、6回以内なので注意する。
4 ダコニール1000は、漂白・退色などによる斑点を生じる場合があるので着色期以降の散布は避ける。薬液による汚れが生じるおそれがあるので、収穫間際の散布は避ける。また、かぶれに注意する。
5 SDHI剤≪７≫、QoI剤≪１１≫は耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
6 ストロビーフロアブルは、高温多湿条件下では薬害を生じる場合があるので、使用しない。また、他剤との混用は薬害が生じる場合があるので注意する。
浸透性を高める展着剤の使用にあたっては、事前に適否を確認する。

防除方法

1 チッソ質肥料の過用を避ける。
2 発病の多いほ場では、密植を避け風通しを良くする。
3 被害葉は早めに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
4 抵抗性品種を選ぶ。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

5 連作はできるだけ避ける。
6 土の跳ね上がり防止のために、わらまたは、ポリフィルムでマルチングを行う。
7 発生が見込まれる時期に下記の薬剤を散布する。
・ダコニール1000 ＜Ｍ５＞【1000倍　発病前～発病初期／6回】
・ダコニールアルファ ＜Ｍ５＞【2000倍　発病前～発病初期／6回】
8 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・ベンレート水和剤 ＜１＞【2000～3000倍　－／6回】
・ストロビーフロアブル ≪１１≫【2000～3000倍　発病初期／3回】
・パレード20フロアブル ≪７≫【褐斑病　2000倍　発病初期／3回】
・ポリオキシンAL水溶剤 ＜１９＞
【花き類・観葉植物　黒斑病　2500倍　発病初期／8回】

白さび病

留意事項

1 施設栽培では盛夏時にやや発生が減少するが、一年中発生する傾向がある。
露地栽培では初夏と秋期に発生が多い。
2 発病適温は17℃前後で、過湿条件下で多発する。
3 薬剤による防除では、予防散布が重要である。
4 薬剤散布は葉の裏を中心に行うと効果的である。
5 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
6 ダコニール1000、ダコニールアルファに含まれる成分TPNの総使用回数は、6回以内なので注意する。
7 ダコニール1000は、漂白・退色などによる斑点を生じる場合があるので着色期以降の散布は避ける。薬液による汚れが生じるおそれがあるので、収穫間際の散布は避ける。また、かぶれに注意する。
8 ジマンダイセンフロアブルはかぶれに注意する。
9 アミスター20フロアブルは、浸透性を高める展着剤の使用にあたっては、事前に適否を確認する。
10 SDHI剤≪７≫、QoI剤≪１１≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 発病の多いほ場では、密植を避け風通しを良くする。
2 被害葉は早めに取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
3 抵抗性品種を選ぶ。
4 被害株からの採穂を避ける。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

5 発生が見込まれる時期に下記の薬剤を散布する。
・ダコニール1000 ＜Ｍ５＞【1000倍　発病前～発病初期／6回】
・ダコニールアルファ ＜Ｍ５＞【2000倍　発病前～発病初期／6回】
・ジマンダイセンフロアブル ＜Ｍ３＞【500～800倍　－／8回】
・ハチハチ乳剤 劇 ＜３９＞【1000倍　発病初期／4回】
・サンヨール ＜－＞【500倍　発生初期／8回】
6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アミスター20フロアブル ≪１１≫【2000倍　発病初期／5回】
・トリフミン乳剤 ＜３＞【1000倍　－／5回】
・ラリー乳剤 ＜３＞【3000倍　発病初期／5回】
・カナメフロアブル 劇 ≪７≫【4000～8000倍　発病初期／3回】
・ベンレート水和剤 ＜１＞【1000倍　－／6回】
7 低温時の施設栽培では、くん煙剤も有効である。(Ⅻ省力安全防除　1くん煙　参照)

キクえそ病・キク茎えそ病

留意事項

1 本病はアザミウマ類によって媒介されるウイルス病である。
2 病原ウイルスは、キクえそ病がトマト黄化えそウイルス(TSWV)、キク茎えそ病がキク茎えそウイルス(CSNV)である。
3 生育の後半から着蕾期にかけて病徴が現れる(キクえそ病)。
4 症状はよく似ており、病徴による判別は困難。

防除方法

1 ウイルスに感染していない親株から採穂する。
2 発病株は直ちに抜き取り、ほ場外に持ち出し処分する。
3 アザミウマ類の防除を徹底する。
4 収穫後、親株は摘蕾し、アザミウマ類の寄生を減らす。
5 ほ場及び周辺の除草を徹底する。

根頭がんしゅ病

留意事項

1 採穂時は土に触れないように注意する。

防除方法

1 病原菌に汚染されていない床で育苗する。
2 発生した苗床、本ぽは土壌消毒を行う。(ⅩⅢ土壌消毒　参照)

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

アザミウマ類

留意事項

1 花弁には主にミカンキイロアザミウマ等が、葉では主にクロゲハナアザミウマ等が発生する。
2 花弁への被害を防ぐため、膜割れ(蕾から着色した花弁が見える前)前後の防除を徹底する。
3 青色粘着トラップの設置により、発生密度を調査できる。
4 品種によって被害の現れ方に差がある。
5 近紫外線カットフィルムを使用するときは、赤～紫系統の品種は色づきが悪くなるため、栽培を避ける。
6 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 施設栽培では、開口部を防虫ネットで被覆し、成虫の侵入を防止する。
2 ビニル等のマルチングにより土中で蛹化するのを防ぐ。
3 近紫外線カットフィルムの被覆により、成虫の侵入を抑制する。
4 施設周辺の除草を行う。
5 露地でも越冬するため、親株は必要最低限を残し、摘蕾して寄生を減らす他、冬期防除を行う(ミカンキイロアザミウマ)。
6 下記の薬剤を施用する。
・ダントツ粒剤 ＜４Ａ＞【2g／株　生育期株元散布　発生初期／4回】
7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・ディアナSC ＜５＞
【花き類・観葉植物(除りんどう)　2500～5000倍　発生初期／2回】
・アファーム乳剤 ＜６＞【1000～2000倍　発生初期／5回】
・モスピラン顆粒水溶剤 劇 ＜４Ａ＞
【花き類・観葉植物(除ストック、りんどう)　2000倍　発生初期／5回】
・グレーシア乳剤 ＜３０＞【2000倍　発生初期／2回】
・ファインセーブフロアブル 劇 ＜３４＞【2000倍　発生初期／2回】

アブラムシ類

留意事項

1 新梢、新葉に寄生し、古葉にはほとんど寄生しない。
2 ウイルス病を媒介する。
3 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

4 ダントツ粒剤の成分クロチアニジンの総使用回数は4回以内。

防除方法

1 施設栽培では、開口部を防虫ネット（目合い0.8mm以下）で被覆し、有翅虫の侵入を防止する。

2 下記の薬剤を施用する。

・ダントツ粒剤 ＜４Ａ＞
【6kg／10a　生育期株元散布　発生初期／4回】または
【1～2g／株　生育期株元散布　発生初期／4回】

・モスピラン粒剤 ＜４Ａ＞【0.5～1g／株　株元散布　生育初期／1回】

・オルトラン粒剤 ＜１Ｂ＞【3～6kg／10a　株元散布　発生初期／5回】

3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・トランスフォームフロアブル ＜４Ｃ＞【2000倍　発生初期／3回】

・スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤 ＜４Ａ＞
【2000～3000倍　発生初期／5回】

・アディオン乳剤 ＜３Ａ＞
【花き類・観葉植物(除はぼたん)　2000～4000倍　発生初期／6回】

・コルト顆粒水和剤 ＜９Ｂ＞
【花き類・観葉植物(除チューリップ、ばら)　4000倍　発生初期／4回】

・ハチハチ乳剤 劇 ＜２１Ａ＞【1000倍　発生初期／4回】

4 施設内では、くん煙剤の使用も有効である。(Ⅻ省力安全防除　1くん煙　参照)

オオタバコガ

留意事項

1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 施設や簡易パイプ組みにより防虫ネット（目合い4mm以下）で被覆し、成虫の飛来を防ぐ。

2 食害痕や虫フンに注意し、捕殺に努める。

3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・アファーム乳剤 ＜６＞【花き類・観葉植物　1000倍　発生初期／5回】

・ブロフレアSC ＜３０＞【2000～4000倍　発生初期／3回】

・コテツフロアブル 劇 ＜１３＞【2000倍　発生初期／2回】

・プレオフロアブル ＜ＵＮ＞【花き類・観葉植物　1000倍　発生初期／4回】

・ディアナSC ＜５＞
【花き類・観葉植物(除りんどう)　2500～5000倍　発生初期／2回】

・フェニックス顆粒水和剤 ＜２８＞【2000倍　発生初期／4回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・デルフィン顆粒水和剤 ＜１１Ａ＞【1000倍　発生初期／－】

ヨトウムシ類

留意事項

1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 施設や簡易パイプ組みにより防虫ネット（目合い4㎜以下）で被覆し、成虫の飛来を防ぐ。
2 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・アファーム乳剤 ＜６＞【花き類・観葉植物　1000倍　発生初期／5回】
・コテツフロアブル 劇 ＜１３＞【2000倍　発生初期／2回】
・ブロフレアSC ＜３０＞【ハスモンヨトウ　2000～4000倍　発生初期／3回】
・プレオフロアブル ＜ＵＮ＞
【花き類・観葉植物　ハスモンヨトウ　1000倍　発生初期／4回】
・トルネードエースDF ＜２２Ａ＞
【ハスモンヨトウ　シロイチモジヨトウ　2000倍　発生初期／4回】

マメハモグリバエ

留意事項

1 品種によって被害の現れ方に差がある。
2 近紫外線カットフィルムを使用するときは、赤～紫系統の品種は色づきが悪くなるため、栽培を避ける。
3 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 施設栽培では、開口部を防虫ネット（目合い0.8㎜以下）で被覆し、成虫の侵入を防止する。
2 ビニル等のマルチングにより土中で蛹化するのを防ぐ。
3 近紫外線カットフィルムの被覆により、成虫の侵入を抑制する。
4 施設周辺の除草を行う。
5 被害株や葉、残さは、ほ場外へ持ち出し、ビニルで覆ったり、穴に埋めたりして処分する。
6 下記の薬剤を施用する。

・ダントツ粒剤 ＜４Ａ＞【2g／株　生育期株元散布　発生初期／4回】

7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・アファーム乳剤 ＜６＞
【花き類・観葉植物　ハモグリバエ類　1000倍　発生初期／5回】
・スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤 ＜４Ａ＞
【ハモグリバエ類　1000～2000倍　かん注（1L／㎡）　発生初期／5回】
・ディアナSC ＜５＞
【花き類・観葉植物(除りんどう)　ハモグリバエ類　2500～5000倍
発生初期／2回】
・カスケード乳剤 ＜１５＞【2000倍　発生初期／3回】
・ハチハチ乳剤 劇 ＜２１Ａ＞【ハモグリバエ類　1000倍　発生初期／4回】

ハダニ類

留意事項

1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
2 ナミハダニは薬剤抵抗性が生じており、効果の劣る薬剤も出てきているため、薬剤選択は特に注意する。

防除方法

1 収穫後の株は放置せず持ち出し処分する。
2 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・バロックフロアブル ＜１０Ｂ＞【花き類・観葉植物　2000倍　発生初期／1回】
・コテツフロアブル 劇 ＜１３＞【2000倍　発生初期／2回】
・ダニオーテフロアブル ＜３３＞【花き類・観葉植物　2000倍　発生初期／2回】
・カネマイトフロアブル ＜２０Ｂ＞【1000～1500倍　－／1回】
・コロマイト乳剤 ＜６＞【1500倍　－／2回】
・マイトコーネフロアブル ＜２０Ｄ＞【ナミハダニ　1000倍　開花前まで／1回】
・サンクリスタル乳剤 ＜－＞【花き類・観葉植物　600倍　－／－】
・サンヨール ＜－＞【500倍　発生初期／8回】
3 施設では、くん煙剤の使用も有効である。(Ⅻ省力安全防除　1くん煙　参照)

ネグサレセンチュウ

防除方法

1 連作を避ける。
2 健全株から採穂する。
3 土壌消毒を行う。(ＸⅢ土壌消毒　参照)
4 フレンチ種のマリーゴールドを2.5か月以上栽培すると抑制効果がある。
5 下記の薬剤を施用する。
・ネマトリンエース粒剤 ＜１Ｂ＞【20～25kg／10a　全面土壌混和　定植前／1回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

－きく－

・ネマキック粒剤　＜１Ｂ＞【20kg／10a　全面土壌混和　植付前又は定植前／1回】
・ガゼット粒剤 劇　＜１Ａ＞【30kg／10a　全面土壌混和　定植時／3回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。